

## 西田谷洋編

## 『文学研究から現代日本の批評を考える』

## ——批評・小説・ポップカルチャーをめぐる——

榊

祐

一

九〇年代前半からの「文化研究」化の進展により文化全般を研究対象にし得るようになった日本近代文学研究が、ある種のポピュラー文化（リアニメ・漫画・ラノベ等の若者向けエンタテイメント）を本格的に射程に入れ始めたのはゼロ年代中頃のこと。日本近代文学研究者を主な書き手とするポピュラー文化論集としての性格を持つ本書は（河野のみ英文学者）、まさにそのような流れの中に位置づけられるものであり、編著者西田谷を含め、日本近代文学研究者でありつつポピュラー文化研究をも積極的に進めてきた研究者が多く含まれている。類書としては『日本サブカルチャーを読む』（二〇一五）があるが、その題名からも伺えるように、本書は文学研究者によるポピュラー文化論集という性格に収まるものではない。本書はポピュラー文化だけでなく、ポピュラー文化「批評」をも「文学研究の立場から考察」しようとするものだからである（西田谷「はじめに」）。

「文学研究の蓄積を踏まえない批評の言説」に対する、「主張」の「粗雑さ」「過剰な意味づけ」といった批判、また「安

易にそうした言説に依存する文学研究の側の問題」の相対化という形でも語られる、後者のような志向は（「はじめに」）、従来の日本文学研究でも散見されるものではある（例・長谷川泉『近代日本文学』一九五八／高田瑞穂「近代文学の研究法」『解釈と鑑賞』一九六〇・一〇）。だが本書で注目すべきは、その批判・検証の眼差しが向けられているのが——（文芸）批評一般ではなく——ゼロ年代批評と呼ばれるある種のポピュラー文化批評、並びに、ゼロ年代批評に焦点化することで見えてくるような批評的系譜だということだ。そしてそのような批判・検証対象の選択こそが、その構成を含め、本書に固有性をもたらしている。

方法や問題意識の面で八〇年代以降の日本近代文学研究に大きな影響を与えながら、本格的な位置づけ作業が行われてこなかった亀井秀雄を集中的に論じたⅢ部（小谷論、矢口論、服部論）は本書の大きな成果だが、ポピュラー文化とポピュラー文化批評に対する考察を目論む本書で、何故、亀井に焦点を当てる必要があるのか。それは、本書中でゆるやかに共

有されている【柄谷行人↓大塚英志↓東浩紀↓東以降のゼロ年代批評家たち】という、かなり独特な批評の系譜を前提とすることで初めて理解出来るようになる。ゼロ年代批評の大きな論点に、大塚英志のまんが・アニメ的リアリズム論(『キヤラクター小説の作り方』等)をふまえたりリアリズム論があるが、その大塚の論に影響を与えた「批評家」柄谷(の『日本近代文学の起源』)は、本書においていわばゼロ年代批評の起源と位置づけられており、亀井はその柄谷を相対化し得る「日本近代文学研究者」として本書に呼び出されていると考えられるのである。

なお本書で、西田谷「はじめに」と共に、ゼロ年代批評への批判・検証を文字通りの意味で行っているのは、千田論と大橋論の二つ。前者では批評の社会的役割の変容という現状認識の下に、東浩紀『動物化するポストモダン』を起点とするゼロ年代批評の見取り図が描き出され、後者では、ライト文芸の生産と受容のありように注目しつつ、それらがゼロ年代批評のライトノベル論の枠組みでは捉え切れないものになっていることが示される。ゼロ年代批評への強い否定の意志が読み取れる西田谷・大橋、ゼロ年代批評家のプラス・マイナス面両方を見て行こうとする千田というように、三者のスタンスは一樣ではないが、ゼロ年代批評に対する日本近代文学研究者の捉え方が公に示されているという点でいずれも注目すべきものである(加えて言うくと、柳瀬論も、ゼロ年代批評が提示したフラット化をめぐる論のポジティブな読み替えを行おうとしている点ではゼロ年代批評への応答の一つと言える)。

最後に、本書のポピュラー文化論集としての側面について。本書では、アニメ(中村論、山田論、西田谷論、河野論、近藤論)、マンガ(岩川論)、ライトノベル(廣瀬論)、娯楽映画(河野論、水川論、近藤論)、娯楽映画の小説化作品(水川論)、少女雑誌・小説(倉田論)、ライト文芸(大橋論)といったポピュラー文化が、「物語」「テクスト」「表象」といったレベルに焦点を当てつつ論じられているのだが、「文学研究の立場」によるポピュラー文化研究という本書の志向に対応するものとして注目されたのは、水川論と近藤論の二つ。文学研究の場で洗練されてきた物語論を丁寧に用い、分析対象のジャンルやメディア特性を尊重した分析をも行おうとする両論は、文学研究の強みを生かしたポピュラー文化論の可能性を示しているように思う。特に、作品の物語分析と「原作映画―小説化作品」をめぐる作家論的分析をわけあわせることで、小説『リンドダリンダ』に映画『リンドダリンダ』を小説化する営為自体が「表現」されていることを明らかにした水川論は、「テクスト論」以降の日本近代文学研究で工夫されてきた新たな作家論的分析が生かされているという点でもとても印象に残る論であった。

(二〇一七年五月二六日 ひつじ書房 三六四頁 三二〇〇円+税)

(さかき・ゆういち 台湾・南臺科技大學助理教授)